

研究紀要

第29号

- | | |
|--|--|
| 奥東京湾東岸地域における関山・黒浜式期の貝塚 | 古谷 渉 |
| 磨製石斧の材料と加熱処理(2) | 大屋 道則 |
| 川越田遺跡の手握ね土器と祭祀(3) | 福田 聖
赤熊 浩一
岡本 千里
澤口 美穂
大屋 道則 |
| 埼玉県の新輪棺墓 | 宮村 誠二 |
| 埼玉県における横穴式石室の石材加工について | 青木 弘 |
| 埼玉県における古代火葬墓—武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に— | 西田真由子 |
| 常陸国南部における古代寺院の展開
—国分寺軒瓦の分布から見た寺院の在り方— | 梶間 孝志
宮原 正樹 |
| 武蔵型板碑における種子規模の変遷について | 砂生 智江 |
| 「毛塚の石仏」と初発期陽刻図像板碑 | 村山 卓 |

2015

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第1号住居跡貝層検出状況(南から)



5 「ヌ」グリッドコア4 45層(焼貝層)



2 「ネ」グリッドピット6検出状況(東から)



6 「ヒ」グリッドコア5 焼土・焼貝層断面



3 「ヌ」グリッドコア4 貝層、焼土・焼貝層断面



7 ピット5貝検出状況

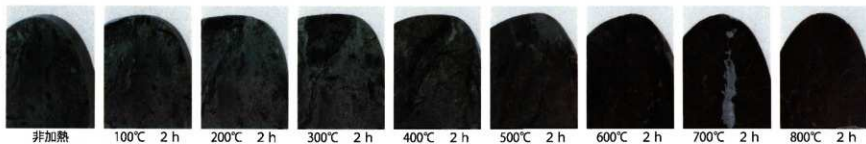


4 「ヌ」グリッドコア4 44層(焼土層)、87a層(焼土・焼貝層)

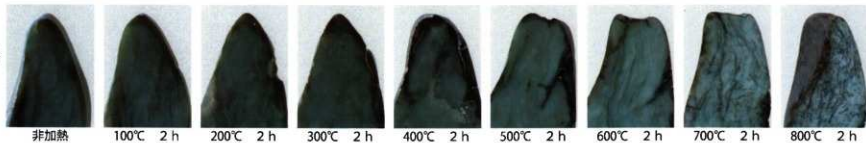


8 ピット5断面

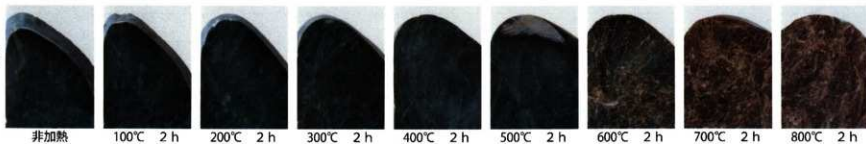
資料
1



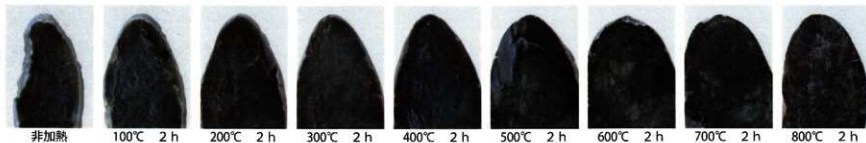
資料
2



資料
3

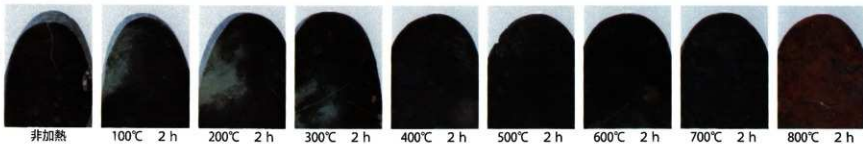


資料
4

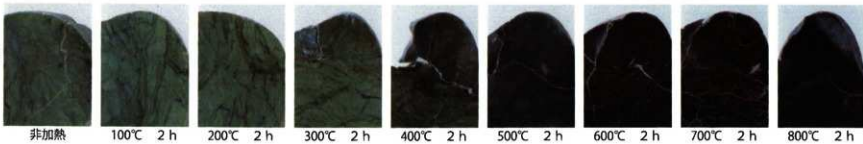


卷頭圖版 3 (大屋)

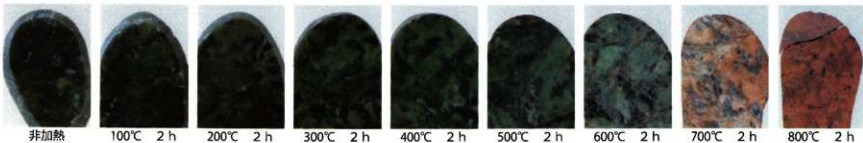
資料
5



資料
6



資料
7





1 東松山市 毛塚の石仏 (全景)



2 東松山市 毛塚の石仏 (側面)



3 東松山市 毛塚の石仏 (部分)



2 川島町 長楽の石仏 (部分)

目次

巻頭図版

序

- 奥東京湾東岸地域における関山・黒浜式期の貝塚…………… 古谷 涉 (1)
- 磨製石斧の材料と加熱処理 (2)…………… 大屋道則 (17)
- 川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀 (3)…………… 福田 聖
赤熊浩一
岡本千里
澤口美穂
大屋道則 (19)
- 埼玉県の埴輪棺墓…………… 宮村誠二 (37)
- 埼玉県における横穴式石室の石材加工について…………… 青木 弘 (51)
- 埼玉県における古代火葬墓 - 武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に -
…………… 西田真由子 (81)
- 常陸国南部における古代寺院の展開 - 国分寺軒瓦の分布から見た寺院の在り方 -
…………… 昼間孝志
宮原正樹 (91)
- 武蔵型板碑における種子規模の変遷について…………… 砂生智江 (109)
- 「毛塚の石仏」と初発期陽刻画像板碑…………… 村山 卓 (123)

川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀（3）

福田聖 赤熊浩一 岡本千里 澤口美穂 大屋道則

要旨 本庄市川越田遺跡では、手捏ね土器が中心となる祭祀用具である。前稿で示したように、手捏ね土器は土師器製作者によって製作されており、土師器の一器種としての一般性を持つ。同時に古墳時代の祭祀用具の中では、坏、甕等の土師器の容器よりも希少性があり、使用も限定され、特別性が認められる。祭祀遺跡における出土が稀な鉄器、須恵器は更に特別性が高い。古墳時代の祭祀には使用用具による強弱があると考えられる。手捏ね土器は、土師器よりも特別性があることから製作における制限が窺え、集積された使用箇所が集落の安定のために重要な地理的な地点に当たり、製作使用に当たっては一定程度の首長の関与が推定される。使用される対象は必ずしも限定的ではないが、河川の合流点などの水の祭祀に関係する場合が多いようである。川越田遺跡では、古女堀川の安定のために継続した祭祀が行われ、氾濫や流路変化などの特別な場合に、より強い祭祀が首長によって行われたと考えられる。本稿は既に発表した同題論の最終編である。

はじめに

本論考では、(1)において出土状況の分析、白玉について検討し、(2)において手捏ね土器の検討を行った。

川越田遺跡第1号祭祀跡は、平面的には大きくA・Bの二群に分かれ、更に各々が4、11の小ブロックから成る。立面的分布から復元される遺物の原位置の標高、手捏ね土器の5段階の変遷、白玉の孔径、最大径の変化、母岩との関係から各ブロックは13→9b→5、15→2、3、8→12、14a→11→9a→10→6の組み合わせと順序が推定された。論考(1)で述べたように、本祭祀跡の形成期間は6世紀中葉から後半にかけての30～50年間と見込まれ、手捏ね土器の整形手法によるセット数33と対応するものと推定した。

中でも第5～14aブロックにかけては、一つのブロックにおける個体数、セット数が多く、祭祀が最も安定的、大規模に行われたと考えられる。

白玉は61点の出土で、第5・9ブロックに集中する傾向が見られる。全体の個数としては数点ずつが使用されたと推定した。

土師器坏・甕は特定のブロックに集中して分布する傾向が認められた。その一方で、ほとんど土師器が出土しないブロックもある。

鉄製品は5、8～10ブロックから出土し、特に第5・9ブロックから集中して出土した。

以上のように①第5・9ブロックのように手捏ね土器、土師器、白玉、鉄製品を使用品目とする場合と、②手捏ね土器、土師器、白玉の場合、③手捏ね土器、白玉の場合の3レベルが存在し、場合に応じた道具立てが取られていたと考えられる。

中でも③の手捏ね土器、白玉のセットは最も基本的な組み合わせと考えられる。(2)ではこの手捏ね土器の分類と観察所見の詳細を示した。

手捏ね土器は、その形態から坏型、甕型、壺型などの3群4系統15類に分類できる。この分類を通して、手捏ね土器の製作はこれまで言われてきたような祭祀の際に、単に粘土を手で捏ねて不特定多数の者によって行われたのではなく、土師器の工程を踏襲し、土師器製作に用いる工具が使用されており、土師器の製作者が深く関与したと推定される。

1 器物としての手捏ね土器の一般性と特別性

製作手法において、模倣坏と同様の土師器の一器種と言っても過言ではないほどの一般性があるにも関わらず、これまで型式論的検討が行われなかったのは、論考(2)で述べたような製作手法について検討ができないという思い込みと出土個体数が少ないという特別性による。

手捏ね土器の一般性については、川越田遺跡を除いた他遺跡の様相からも窺える。表1は埼玉県北部で手捏ね土器を出土した6世紀代の集落遺跡である。22遺跡掲載したが(表1)、いずれも特別な状況ではなく、他の土師器とともに伴出しており、取り扱いには土師器と同様である。逆に各住居跡に土師器と同様に持ち込まれている点が、土師器製作者集団の仕事の一部であることを示している。

加えて、出土遺跡は多くが大規模な集落である。そうした集落は土器製作を行っていると考えられる場合が多く、製作された土師器の一つとしてもたらされる場合が多かったと推定される。

一方、祭祀遺跡の出土遺物の中では、実は手捏ね土器は一般的ではない。川越田遺跡の祭祀跡と同時期の榛名山の噴火によって埋没し、当時の状況そのものを伝えると言われる群馬県渋川市中筋遺跡(大塚1988)、中村遺跡(南雲1986)や渋川市(子持村)黒井峯遺跡(石井1987)では全く出土していない。三遺跡では土師器坏がその中心である。他の祭祀跡とされる遺構や遺物の集積が見られる場合にも、上述の集落遺跡同様に、数点のみがその組成に含まれる。遺跡単位で集成すれば10点以上になる場合もあるが、それは坏や甕や高環が遺構数に比例して、遺跡単位の出土量が増加するのと同様の現象である。

特に集積型祭祀として著名な、深谷市城北遺跡(山川1995)、群馬県群馬郡箕郷町下芝天神遺跡(洞口1998)などで全く出土していない点は重要である。

単独の祭祀跡で10点以上が集積している例は、県内では本遺跡と美里町こぶヶ谷戸祭祀遺跡、上尾市藤波遺跡(栗原1963)に限られている。目を転じて他県に向けた場合でも、川越田遺跡と同時期の例は、論考(2)であげた群馬県前橋市荒砥前原遺跡(藤巻・大木ほか1985)、茨城県稲敷郡桜川村尾島貝塚(人見1988)などに限られる。

こぶヶ谷戸祭祀遺跡(第1・2図)は5世紀末から6世紀前半に形成されている。埼玉県内では最大の祭祀遺跡である。志戸川の支流天神川と地神祇川の合流地点に近い微高地上に立地し、花崗岩の巨岩である「こぶ石」を中心に形成されている。2回の調査が行われ、手捏ね土器約1600点が出土している。古い調査のため詳細は明らかでないが、坂本和俊が遺跡の特徴について次のようにまとめている(東日本埋蔵文化財研究会1993b)。

「①地域の水源と考えられる志戸川上流の天神川と地神祇川が合流する地点に形成された祭祀遺跡で、両河川の名称も祭祀の内容を考える上で示唆的である。②岩座と考えられる石の周辺で祭祀が行われている。この石は報告通り花崗岩とすれば、かなり遠くから運ばれたものである。③祭祀の盛行したのは和泉初期～鬼高初頭期と考えられるが、祭祀的色彩が濃いとされる高環が出土しない。④同時期の祭祀遺物を出土する住居址からは古式須臾器の伴出が多いが、それが見られない。⑤遺物の組成としては、手捏ね土器が圧倒的に多い。⑥石製模造品は軟らかな石材で、孔の無い粗雑なものが多く、組成的には剣が大半を占める。⑦遺物の出土状況から祭祀は繰り返し何度も行われたと考えられ、手捏ね土器・土師器、手捏ね土器のみ、手捏ね土器・土師器・石製模造品、土師器のみ、石製模造品のみ、手捏ね土器・土師器・鉄器、手捏ね土器・土師器・石製模造品・鉄器、土師器・鉄器、土師器・石製模造品の組み合わせがある。しかし、資料の

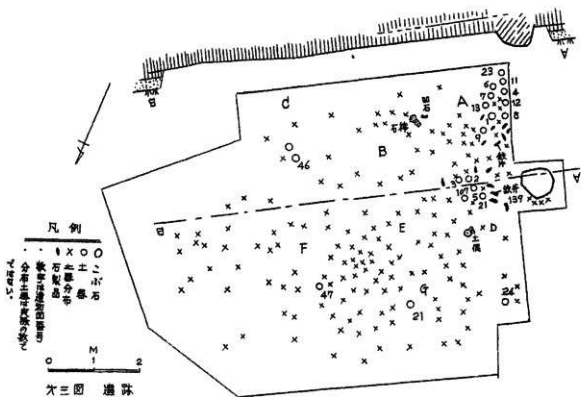
第1表 集落遺跡出土の手捏ね土器の伴出遺物

遺跡名	出土遺構	時期	伴出遺物	文献
上敷先	S J 19	5C中	高坏・ミニチュア・手捏ね・はそう・埴・环・埴小笠置・鉢・瓶・甕・甕	事業団 128集
	S J 103	6C前	环・手捏ね・甕・支脚・高台付埴・甕	
	S J 169	6C中	环・手捏ね・ミニチュア・鉢小笠置・甕・小型甕・壺・高坏・台付埴・支脚・甕	
	S J 217	8C前	环・壺・高坏・手捏ね・高坏・台付埴・甕・甕	
	谷		环・壺・高坏・手捏ね・埴・台付埴・鉢・小型甕・小型甕・甕・甕・高台付埴・高台付埴・甕・高台付埴・平甕	
	S J 175	7C前	环・小型甕・甕・甕・ミニチュア	
如意Ⅲ	S J 179	6C	甕・ミニチュア・土師鉢	事業団 276集
	S J 217	7C前	环・甕・甕・小型甕・甕・鉢・ミニチュア・土師	
	S J 240	5C後	甕・环・手捏ね・高坏・甕・小玉	
如意IV	S J 273	6C前	土師甕・手捏ね・須恵甕・土師环・須恵环・土師小型甕・土師鉢・土師甕	事業団 285集
	S J 423	5C末	土師环・土師甕・土師甕・手捏ね・ミニチュア・土師鉢	
	S J 354	5C後	土師环・土師甕・土師甕・土師小型甕・土師鉢・手捏ね・滑石製模造品	
	グリッド		土師甕・ミニチュア・須恵高台埴・須恵甕・土師环・ほうろく・土師甕・防鉢車・甕	
築道下Ⅱ	S J 180	6C中	环・手捏ね・鉢	事業団 199集
	S J 235	5C後	手捏ね・环・甕・甕	
	S J 317	6C前	环・手捏ね・支脚	
	S J 338	6C前	环・高坏・須恵器坏甕・手捏ね・甕	
	S J 512	7C後	ミニチュア(环)・环・甕・甕	
	S J 549	6C中	ミニチュア(环)・环・高坏・甕・甕	
	S J 377	6C	ミニチュア(甕)・甕・甕・甕	
築道下Ⅲ	S X 16	7C前	模造品・环・小型甕・高坏・甕・土師	事業団 245集
	S J 385	6C前	手捏ね・环・鉢・鉢・甕・甕	
	S J 382	6C中	ミニチュア(甕)・环・鉢・甕・高坏	
	S J 472	6C中	ミニチュア(甕)・环・甕・甕・甕・支脚	
	S J 476	6C中	ミニチュア(甕)・环・鉢・甕・甕・甕	
	S J 366	7C前	手捏ね・高台付埴・环・甕・甕・甕・甕・鉢	
	S J 446	6C前	ミニチュア(环)・手捏ね	
S J 383	8C前	手捏ね・环・鉢・甕・甕・はそう		
八日市	S J 7	5C末	环・鉢・甕・埴・高坏・ミニチュア・甕	事業団 172集
	S J 10	5C末	环・ミニチュア・高坏・甕・甕・甕・甕・支脚	
	S J 11	6C前	环・鉢・高坏・甕・甕・甕・ミニチュア・支脚	
	溝		高台埴・甕・長頸甕・ミニチュア	
	大畑原Ⅱ	5~6C	高坏・埴・高台付埴・甕・ミニチュア・支脚・环・甕・甕	
大野田西	S J 20	弥生	高坏・甕・ミニチュア・土製勾玉・甕・甕・甕・模造品・鉢	事業団 138集
	S J 22	3C前	甕・ミニチュア・土製勾玉・甕・土玉・防鉢車・甕・鉢・高坏	

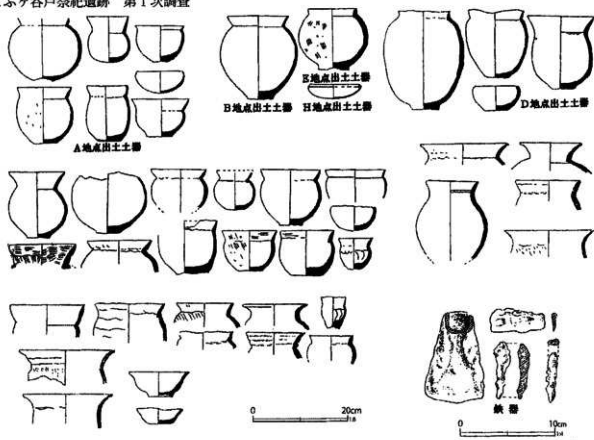
遺跡名	出土遺構	時期	伴出遺物	文献
柳町	S J 37	6C前	甕・高坏・手捏ね・埴・环・甕・小型甕・甕	事業団 128集
	S J 39	6C前	甕・甕・环・手捏ね	
	S J 46	6C前	环・手捏ね	
後張	S J 32	6C末	小型甕・甕・高坏・甕・手捏ね	事業団 26集
	S J 84	5C末	甕・甕・小型甕・环・鉢・手捏ね	
	S J 87	6C前	甕・埴・甕・高台埴・环・甕・鉢・高坏・無蓋甕・小型甕・甕・手捏ね	
	S J 88	6C前	はそう・埴・甕・环・鉢・小型甕・鉢・高坏・手捏ね・甕・甕・甕	
	S J 101	6C前	甕・甕・环・埴・高坏・鉢・甕・手捏ね・はそう	
	S J 125	6C前	甕・埴・鉢・环・高坏・手捏ね・甕	
後張Ⅱ	S J 169	5C後	甕・甕・埴・环・鉢・高坏・鉢・手捏ね	事業団 15集
	S J 10	5C後	甕・小型甕・埴・环・手捏ね・高坏・甕・台付埴	
	S J 57	5C後	埴・手捏ね・甕・高坏・甕	
	S J 71	5C後	甕・甕・小型甕・甕・S字甕・台付埴・小型甕・埴・高坏・甕・环・手捏ね	
	S J 74	4C後	小型甕・高坏・埴・手捏ね・高台・S字甕・台付埴	
	S J 98	5C後	小型甕・甕・埴・高坏・手捏ね・甕	
	S J 131	5C前	甕・台付埴・小型甕・埴・須恵器・环・鉢・手捏ね・甕・高台・高坏・甕・S字甕	
新屋敷東	S J 158	4C後	甕・小型甕・埴・手捏ね・甕・鉢・环・高坏・S字甕・台付埴	事業団 111集
	S J 162	5C初	甕・用・手捏ね・高坏	
	S J 184	5C中	甕・甕・台付埴・甕・埴・小型甕・鉢・手捏ね・高坏	
	S J 187	5C初	甕・甕・甕・小型甕・小型甕・埴・鉢・环・手捏ね・鉢・高坏	
	S J 207	4C末	甕・ミニチュア・台付埴・鉢・高坏・甕・小形丸底甕・环	
城北	河川跡	5~6C	台付埴・甕・長頸甕・环・はそう・大甕・手捏ね	事業団 150集
	S J 111	6C前	环・大型埴・短頸甕・高坏・小型甕・埴・甕・甕・支脚・甕・手捏ね	
	墓形跡Ⅱ	6C前	环・高坏・手捏ね・甕・甕・小型甕	
	S K		环・高坏・手捏ね・甕・甕・甕・即付施連埴・埴	
立野南	遺構外	5~6C	高坏・甕・ミニチュア・手捏ね・支脚・鉢・甕・甕・环・鉢・短頸甕・大型埴・坏蓋・無蓋高坏	事業団 46集
	S J 2	8C初	甕・小型甕・手捏ね・甕・高台埴・环・甕・甕・長頸甕・大型甕	
	S J 14	6C中	环・鉢・甕・甕・手捏ね・台付埴・甕	
砂田前	グリッド	4~6C	鉢・环・埴・小型甕・甕・高坏・手捏ね・はそう・石製模造品	事業団 198集
	区別ⅡF	5~6C	高坏・大型埴・鉢・甕・手捏ね・埴・甕・小型甕・甕・埴・甕・はそう・高坏・高坏・甕・甕・甕・ミニチュア・模造品・土師・鉄鏡	

遺跡名	出土遺構	時期	伴出遺物	文献
砂田前	S J 65	6 C前	環・高环・鉢・壺・甕・瓶・ミニチュア・ 編物石・土器・紡錘車・刺形模造品・ 刀子	事業団 198集
	S J 54	6 C中	環・鉢・甕・壺・甕・瓶・ミニチュア・ 編物石・磨石	
	S J 79	6 C後	環・壺・甕・瓶・ミニチュア・編物石・ 土器・灰石	
	S K 14	7 C前	甕・甕・ミニチュア・灰	
	グリッド		環・埴・鉢・甕・台付甕・鏡・ミニチュア・ 編物石・土器・土製品・養生土器	
今井川越田	S J 4	6 C中	環・埴・台付甕・小壺・高环・甕・ 小壺・丸壺	事業団 177集
	S J 19	7 C初	甕・埴・環・鉢・甕・高环・小壺・ 甕・支脚・土製品	
	S J 24	6 C後	環・小壺・埴・皿・埴・高环・甕	
	S J 62	6 C後	環・皿・埴・支脚・甕・甕・鉢・小壺・ 灰胎壺	
	S J 85	6 C中	環・埴・甕・小壺・甕・鉢・甕	
	S J 90	6 C後	ミニチュア・環・鉢・甕・甕・白玉	
	S J 96	7 C初	埴・土器	
	S J 165	6 C後	甕・ミニチュア・埴・環・鉢・高环・ 甕・丸壺	
	S J 168	6 C後	鉢・埴・小壺・甕・丸壺	
	グリッド	6 C	手控ね・埴・甕・灰・はそう・砥石・ 刀子・白玉・土器	
今井川越田	S J 176	6 C中	甕・環・鉢・高环・甕・小壺・甕・ 瓶	事業団 178集
	S J 227	7 C初	環・鉢・小壺・甕	
	S J 235	6 C	鉢・小壺・甕・甕	
	S J 229	7 C初	鉢・埴・甕	
	グリッド	6 C後	環・甕・手控ね・白玉・土器	
今井川越田	S J 279	7 C前	甕・環・ミニチュア・小壺・小壺・ 甕・甕・支脚	事業団 191集
	S J 283	6 C後	環・高环・埴・甕・甕	
	S J 143	6 C末	ミニチュア・環・埴・甕・鉢・甕・ 甕	
	S J 144	7 C前	ミニチュア・環・高环・甕・鉄製品	
	S J 257	6 C後	埴・台付埴・埴・鉢・小壺・小壺・ 甕・甕・紡錘車	
	S J 126	7 C前	甕・ミニチュア・環・甕・甕・埴・ 鉄製品	
	S J 251	7 C前	ミニチュア・環・高环・土器	
	S J 102	7 C前	ミニチュア・環・甕	
	S J 106	7 C前	ミニチュア・環・埴・鉄製品	
	S J 310	7 C前	環・埴・小壺・甕・鉢	
	S J 313	6 C	ミニチュア・甕	
	S J 316	7 C前	環・ミニチュア・皿・環・埴・甕・甕・ 紡錘車	
	S D 3	7 C前	ミニチュア・環・埴・高环・小壺・ 小壺・甕・甕・鉢・大甕・蓋・埴・ 平瓶・土器	
	四川跡	6 C後	埴・甕・台付甕・高环・小壺・甕・ 大甕・埴・埴・ミニチュア・台付埴・ 鉢・小壺・甕・高台埴・土器	
上橋	S J 5	4 C	甕・埴・手控ね・土器	泉原定次 21集

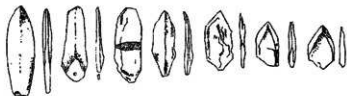
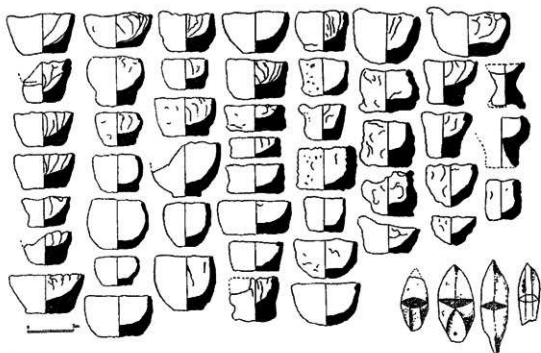
遺跡名	出土遺構	時期	伴出遺物	文献
ミカド	S J 2	6 C前	環・甕・高环・甕・手控ね	見玉町 2集
	S J 7	5 C後	環・鉢・高环・手控ね	
	S J 9	5 C末	環・鉢・高环・手控ね	
	S J 10	5 C後	環・甕・鉢・小壺・小壺・高环・ 手控ね	
	S J 14	5 C後	環・鉢・甕・手控ね	
	S J 15	5 C後	環・鉢・甕・高环・手控ね	
	S J 16	5 C末	環・鉢・甕・高环・甕・手控ね	
	S J 17	6 C前	環・鉢・小壺・甕・甕・小壺・ 手控ね	
	S J 19	6 C初	環・鉢・甕・高环・手控ね	
	S J 20	5 C後	環・鉢・小壺・小壺・手控ね	
	S J 22	5 C末	環・鉢・高环・甕・手控ね	
	S J 23	5 C末	環・鉢・埴・高环・甕・手控ね	
	S J 24	5 C後	環・鉢・埴・高环・甕・甕・手控ね	
	S J 32	5 C後	鉢・小壺・高环・甕・甕・手控ね	
	S J 34	5 C後	環・鉢・小壺・甕・手控ね	
	S J 35	5 C後	環・鉢・高环・甕・手控ね	
	S J 37	6 C中	環・高环・甕・甕・手控ね	
S J 38	6 C前	環・鉢・甕・甕・手控ね		
S J 48	5 C末	環・鉢・小壺・手控ね		
S J 50	5 C末	環・鉢・甕・小壺・手控ね		
S J 53	6 C中	環・鉢・高环・甕・手控ね		
S J 37	7 C後	甕・鉢・埴・蓋・ミニチュア	見玉町 5集	
四川跡	5~6 C	甕・はそう・甕・高环・台付鉢・埴・ 埴・小形丸底甕		
S J 12	6 C後	環・高环・台付甕・甕・ミニチュア		
S J 43	6 C中	環・高环・鉢・台付埴・埴・甕・ 小壺・甕・支脚・ミニチュア・手控ね・ 土器		
S J 47	4 C中	環・皿・高环・台付埴・鉢・小壺・甕・ 埴・小壺・甕・甕・紡錘車・砥石・ 土器・埴・直口甕・台付甕・手控ね		
S J 51	6 C前	埴・鉢・片口鉢・埴・小壺・高环・ 甕・甕・直口甕・環・甕・ミニチュア・ 台付甕・小壺・小壺・台付甕		
S J 62	6 C後	環・鉢・甕・甕・小壺・手控ね・土器・ 砥石		
S J 64	7 C初	環・鉢・小壺・甕・甕		
S J 67	6 C中	環・埴・高环・鉢・甕・小壺・甕・ 甕・甕・白玉		
S J 83	6 C後	環・皿・甕・高环・鉢・小壺・甕・ 甕・ミニチュア・甕・皿・甕		
S J 89		環・甕・甕・甕・手控ね		
S J 96	5 C後	環・埴・高环・甕・小壺・甕・ 甕		
S K 8	7 C前	鉢・甕・甕・環・砥石		
グリッド	4~6 C	有孔高环・甕・甕・甕・環・小壺・ 甕・手控ね・甕・台付甕・高环・砥石・ 有孔円板・打製石片・鉢・埴・支脚・ はそう・皿・埴・直口甕・小壺・ 蓋・土器・白玉・形器・埴・ミニチュア・ 砥石		
その他		環・甕・埴・高环・埴・直口甕・甕・ はそう・手控ね・砥石・白玉		



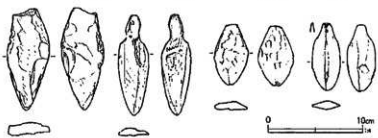
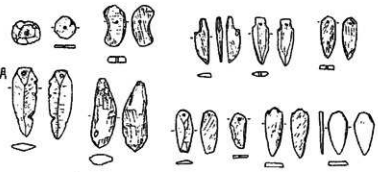
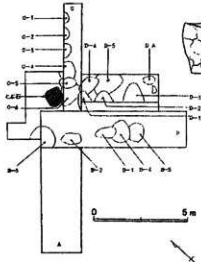
こぶヶ谷戸祭祀遺跡 第1次調査



第1図 こぶヶ谷戸祭祀遺跡(1) (東日本埋蔵文化財研究会 1993 を改変)



こぶヶ谷戸祭祀遺跡 第2次調査



第2図 こぶヶ谷戸祭祀遺跡 (2) (東日本埋蔵文化財研究会 1993 を改変)

制約から、現状ではその組合せと時期的な変遷を結びつけるのは難しい。⑧これらの遺物による祭祀と須恵器や素文八稜鏡を使用した祭祀とは、時間的に断絶している可能性が高い。」

藤波遺跡（第3図）は、既に1962年に団地造成によって湮滅した遺跡で、工事に伴って移動した土の中から手捏ね土器が30点以上と土玉、土師器、須恵器が採集されている。遺跡周辺は荒川支流の江川に注ぐ小河川によって開析が進み、樹枝状の谷が多く形成されている。遺跡は字名の窪が示すような窪地に面するとされており、その谷を流れる小河川が江川に合流する地点にある。報告者の栗原文蔵は、窪地に面する点を重視し、水の神に関する祭祀を推定している。

群馬県佐波郡境町北米岡遺跡（大場1942）は、広瀬川によって形成された自然堤防上に立地する。付近は東側を流れる早川と南側を流れる広瀬川の合流点に近い。輝石安山岩の巨石、「姥石」を中心とする6個の自然石の周辺から、石製模造品14点、坏を中心とする多量の土師器とともに手捏ね土器67点が出土している。こぶヶ谷戸遺跡同様の合流点における巨石祭祀と考えられる。

論考（2）でも挙げた群馬県前橋市荒砥前原遺跡（藤巻・大木ほか1985）は、赤城山南麓斜面地帯の最先端に位置し、荒砥川と神沢川が合流する台地上に立地している。祭祀跡は台地縁辺から氾濫原にかけて形成されている。表土掘削中に遺物が一括して出土したもので、その状況は不明である。古墳時代後期の土器は4561点、手捏ね土器は639点に上る。

祭祀跡の形成箇所は荒砥川と神沢川の合流点を一望できるという。祭祀はこの両河川、あるいは合流点を対象と考えてはば間違いないであろう。やはり論考（2）で取り上げた茨城県稲敷郡桜川村尾島貝塚（第3図）は、浮島の字のある霞ヶ浦南岸の砂州に立地し、南側に尾島神社が存在する。

祭祀跡は、鏡1面、勾玉6点、石製模造品の剣

形34点、有孔円板152点、白玉34点、河原石4点、土製鏡19点、土製勾玉2点、土製円板1点、手捏ね土器78点が出土し、5世紀初頭から6世紀中葉にかけて祭祀が行われたと推定されている。手捏ね土器は、論考（2）で述べたように須恵器と一緒に伴出しており、6世紀中葉に位置づけられる。祭祀は「島神奉養」とされており、背後の尾島神社や北面する霞ヶ浦も関係すると考えられる。

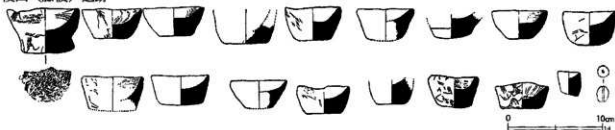
一方、手捏ね土器の使用は、巨石を中心に山を対象とした祭祀にも認められる。

群馬県勢多郡宮城村榎石は、学史的に著名な5世紀後半から6世紀前半の遺跡である（第4図・井上1983ほか）。赤城山の一峰荒山の裾に広がる平坦地に輝石安山岩の巨石、「榎石」を中心とする6個の自然石があり、周辺から石製模造品、異形勾玉（子持勾玉）、硬玉製勾玉とともに手捏ね土器51点が出土している。赤城神社と荒山を結ぶ線上に形成されており、巨石群と赤城山が祭祀の対象と考えられている。

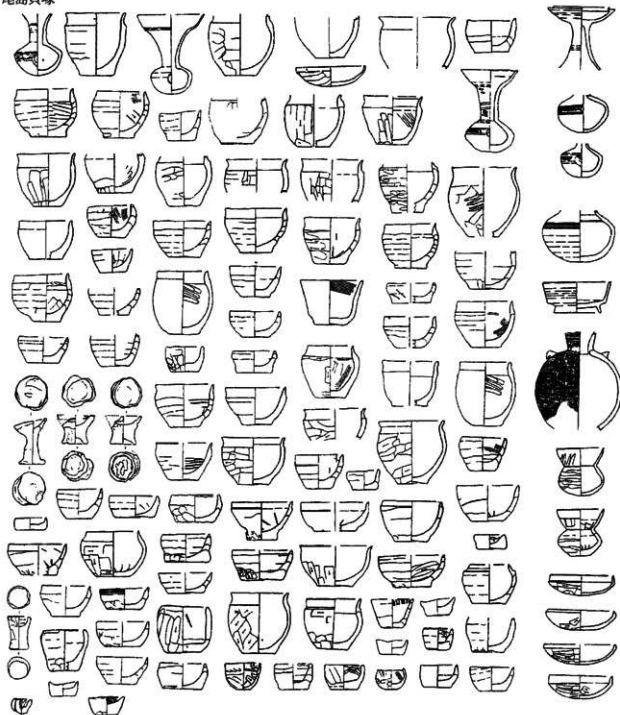
また、手捏ね土器を集積する祭祀は、所謂豪族居宅の祭祀としても認められる。

群馬県伊勢崎市原之城遺跡は、6世紀中葉から後半の豪族居宅である（第5～8図・中澤1988）。低地に舌状に延びる低台地端部で、濠によって台地を切り離す形で造られている。東西約110m、南北約170mの範囲で幅10数mの溝を巡らせ、その掘削土を区画内に盛り上げて台状にしている。祭祀跡は環濠内の東北隅に設けられた高さ約1mの鉤手状の土塁の内側コーナー部から2m四方の遺物の集積として検出された。四隅に須恵器の大型器台を設置し、口縁部を上にした土師器坏を各辺に並べ、その内側に手捏ね土器、石製品が重ねられている。土師器坏約70点、小型壺4点、高坏3点、須恵器大型器台3点、石製模造品150点、刀子1点とともに手捏ね土器約400点が出土している。

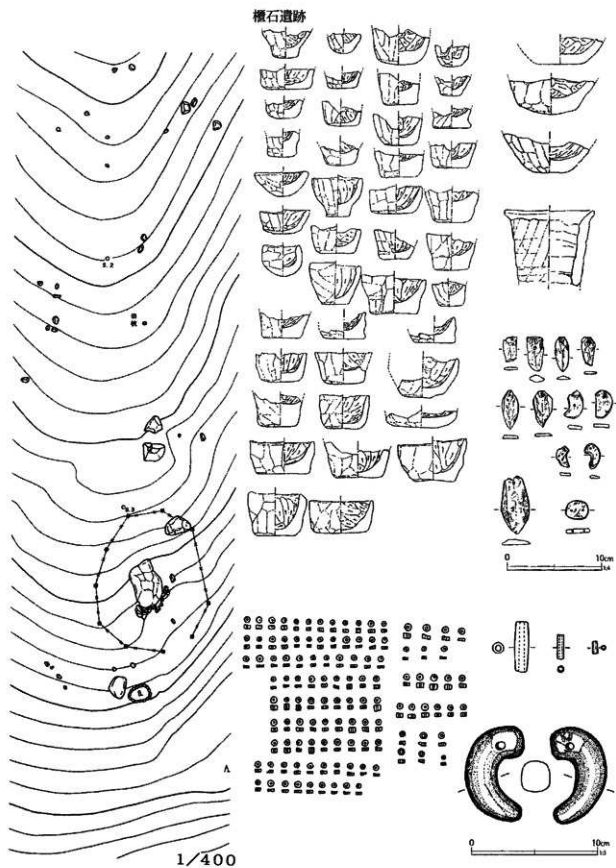
後山(藤波)遺跡



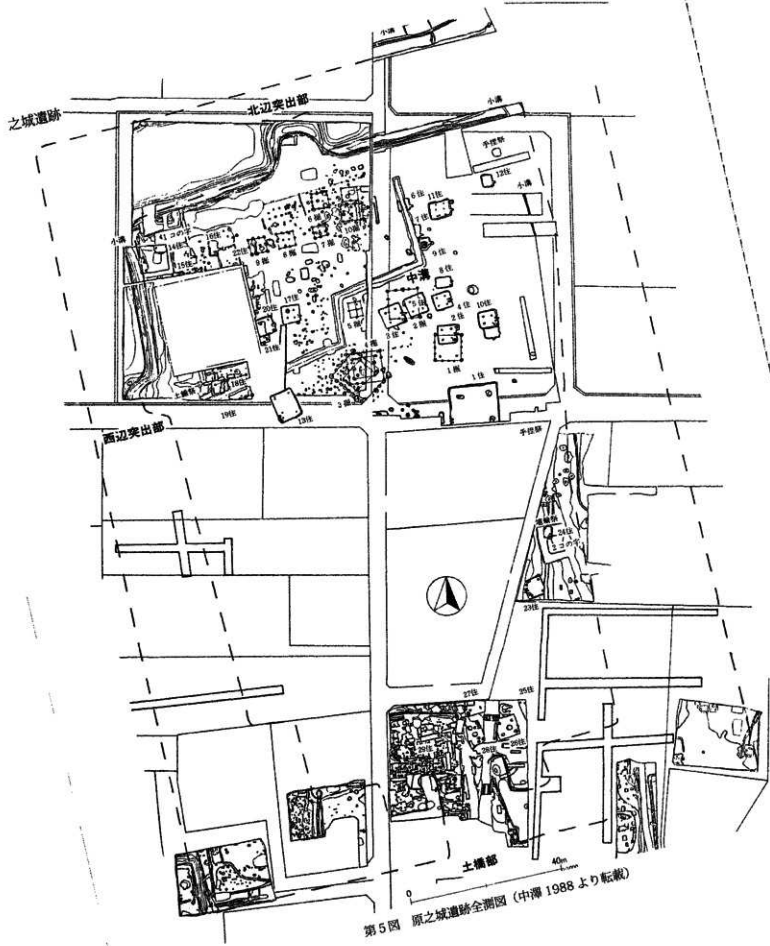
尾島貝塚



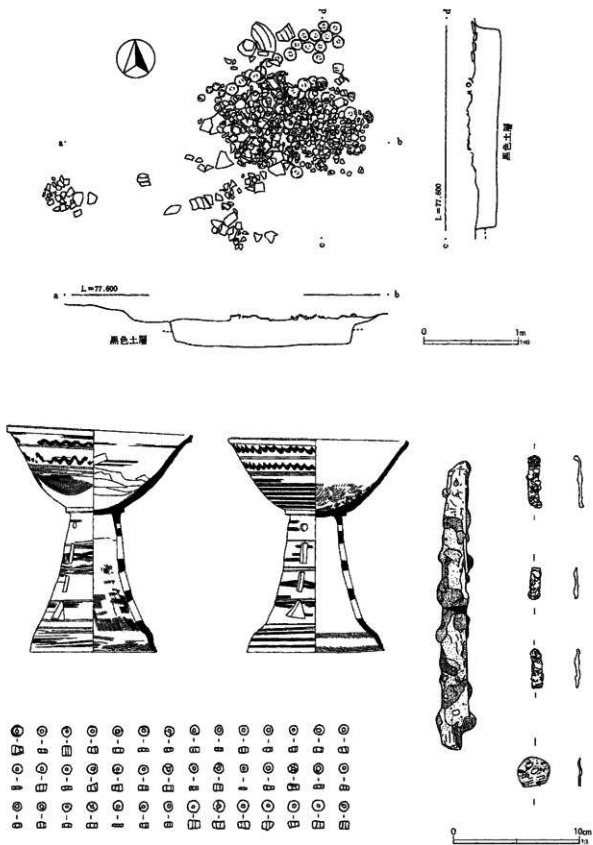
第3図 後山遺跡・尾島貝塚出土遺物(栗原 1963、東日本埋蔵文化財研究会 1993 を改変)



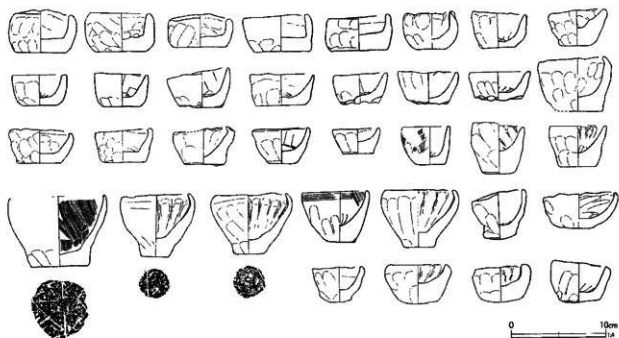
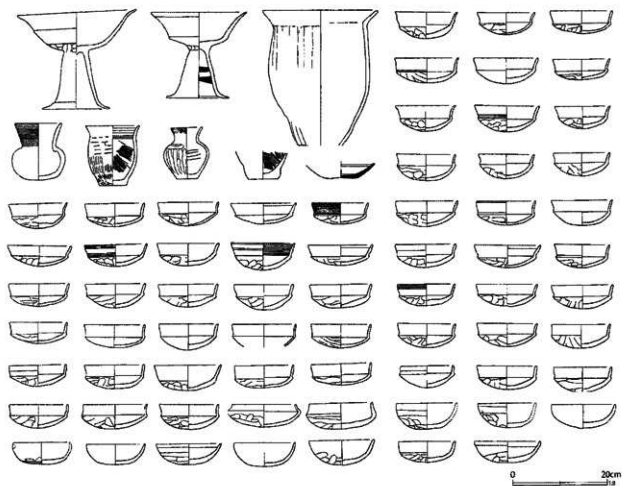
第4図 權石遺跡出土遺物（東日本埋蔵文化財研究会 1993 を改変）



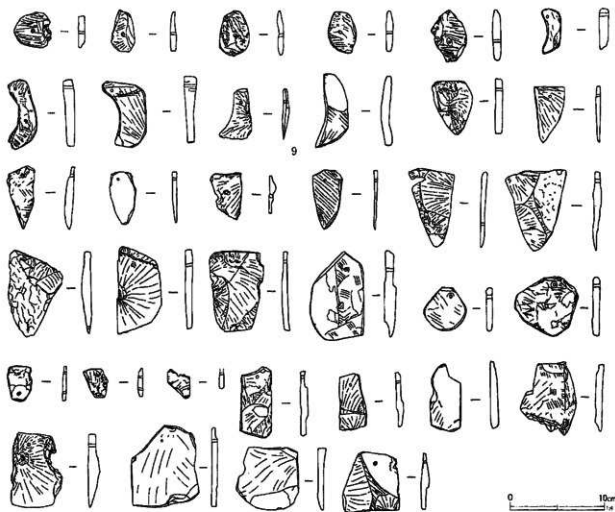
第5図 原之城遺跡全測図 (中澤 1988 より転載)



第6图 原之城遺跡祭祀跡出土遺物（中澤 1988 より転載）



第7図 原之城遺跡出土土器・手捏ね土器（中澤 1988 より転載）



第8図 原之城遺跡出土石製模造品（中澤 1988 より転載）

地域首長の居宅内祭祀と考えられるが、夥しい量の手捏ね土器、土師器、須恵器はそれを集めることができる首長の権力を感じさせる。

このような集積された手捏ね土器は、何を意味しているのだろうか。前述のように、個別の祭祀行為1回あたりに用いる手捏ね土器の個体数は数個単位と推定される。その個体数をもとにすると、例えば尾島貝塚のような個体数は川越田遺跡同様の祭祀の継続性を意味すると考えられる。一方、こぶヶ谷戸や荒砥前原のような例は、複数、もしくは多数の集団による祭祀行為を意味すると考えられる。これは祭祀に環などの土師器が用いられた場合と同様の現象である。

問題になるのは、土師器祭祀との相違である。

まず一般的な器種ではない手捏ね土器が継続して、同一地点に繰り返し用いられる点が、当時のその地点における祭祀の重要性を示している。1回の祭祀行為における複数セットの使用が、複数の執行集団の存在を示唆するとすれば、尚更その祭祀の重要性が感じられる。

次に多量の集積が見られる箇所に、河川の合流点など、生活を左右する集落を越えた地域の重要な地理的なポイントと考えられる地点が多い点である。

同様に噴煙を上げているような火山も、生活を左右する対象である。

その地点が土師器のみの祭祀では充分でない祭祀を必要とする地点であるからこそ、手捏ね土器

が反復して使用されたのではないか。

このように考えると、土師器はあまねく全ての祭祀に用いられる最も一般的な器物で、手捏ね土器は特別性を持つと考えられる。しかし、その特殊性は一般の堅穴建物からも出土するように、隔絶はしていないと考えられる。

2 祭祀の強弱

論考(2)で述べたように、手捏ね土器が土師器よりも特別性が高いとすれば、祭祀には特別な器物を用いる場合とそうでない場合があることになる。特別なものにはより高い効果が見込まれていると考えられる。

川越田遺跡の報告書中で、手捏ね土器は最も一般的な祭祀用具としたが、ここでその位置づけは変更しなければならない。手捏ね土器は土器としての一般性を持つと同時に、祭祀用具としての一定の特別性を持つと評価したい。

同報告書中では、鉄鉾が用いられる特別性についても述べた。群馬県富岡市久保遺跡(井上1988)、群馬県赤城村宮田諏訪原遺跡(小林ほか2005)を例に、強い効果を求める特別な祭祀であるため、執行者が上位階層であると推定した。

同様に須恵器の使用も例が少なく、一般的とは言い難い。

一方、ここでは詳しく触れないが白玉や剣形をはじめとする石製模造品は、祭祀遺跡では土師器と同様に極めて一般性が高い。

篠原祐一氏は、全国の祭祀跡においては記紀に見られるような鏡や剣の実物を用いた例がほとんどないことから、「特別な儀礼にのみ真物を使用したものであろう」(篠原2001pp216-217)と推定している。氏の関心の中心は石製模造品にあるため論は石製品に限られるが、通常の祭祀は形代である石製模造品で行われたとする。篠原氏も、通常と特別の二つの場合があったと考えているのが分かる。

ところで、手捏ね土器については本論考(2)で、土師器製作者の手によるものであると推断した。特別な器種である手捏ね土器は、単なる一部の集落成員の意向を反映しての製作とは考え難い。そこには特別な土器を製作させる首長の関与が推定される。

また、篠原祐一氏によって示された、記紀や風土記の記事では、人的ではないトラブルは首長や「朝」の責任で対処することが社会全体の要請として求められている(篠原2001)。そこには、首長の祭祀における責任と権限が認められる。基本的に世帯のような小さな単位ではなく、集落を代表するような大きな祭祀には首長が執行者として当たったと考えられる。

前述の原之城遺跡で見られた首長の居宅祭祀における夥しい量の手捏ね土器の量は、須恵器大型器台と合わせて、その特別性をよく示している。

器物としては一般性を持つが、その祭祀における使用は限定的で、そのため出土点数が少なく、集積された祭祀例も限られると考えられる。必ずしもどの祭祀にも手捏ね土器があまねく使われるわけではないのである。

祭祀における、通常、特別といった強弱、執行者の差異を勘案すると、祭祀遺跡における器物は、次のように整理できる(第9図)。

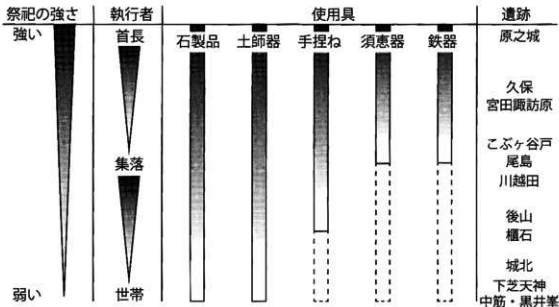
3 手捏ね土器祭祀の性格

それでは手捏ね土器はどのような祭祀に用いられるのであろうか。

大規模集落の住居跡からも散発的に出土が見られるが、その性格、対象はやはり集積された例に象徴されていると考えられる。

論考(2)で見たように、手捏ね土器が集積される場合の対象の多くは、河川の合流点や火山などの大規模な災厄をもたらす自然の脅威である。

土師器ではなく、わざわざ製作した手捏ね土器を用いる「祭祀の強さ」が求められる所以である。



第9図 祭祀用具による祭祀の強弱

中でも、前述の各例からは、特に水に関する大規模祭祀に用いられた場合が多いように感じられるが、いかがであろうか。

古墳時代前期の千葉県安房郡白浜町小滝涼源寺遺跡（小川・大淵 1989）などの遺跡でも大規模な手捏ね土器の集積型祭祀が知られているが、同遺跡もやはり海浜に面した河岸段丘であり、恵みをもたらす大きな存在であるとともに一旦荒れば抗いようのない災害をもたらす海、水の神に対する祭祀が行われていたと考えられる。

どこまで遡り得るのかは不明だが、少なくとも古墳時代における手捏ね土器は、前期から後期まで継続して用いられた伝統的な水の祭祀に広く用いられた器物であった可能性を考えたい。

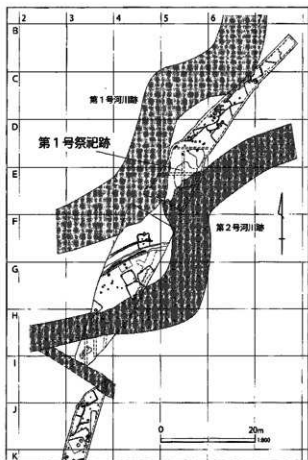
ただし、あくまで容器であることから、「榎石」の例に見るごとく、水の祭祀に特化はできないであろう。

4 川越田遺跡祭祀の性格

最後に、以上の検討から、川越田遺跡の祭祀跡について考察したい。

まず、事実関係をまとめると、次のようになる。祭祀の実施箇所 祭祀跡は、古墳時代前期末に流路となった第2号河川跡の北側河畔に設けられている（第10図）。第1号河川跡は、第2号河川跡が埋没した後に流路となり、本庄一児玉の旧市町境であった旧女堀川まで継続する。

ここで問題となる第2号河川跡は、B区の古墳時代前期の間集落を壊している。他の調査区を含めて川越田遺跡における古墳時代後期の遺構は、明らかに第2号河川跡を避けて造られており、同時期には河川の本格的な流れがあったと考えられる。古墳時代前期末以降に形成された第2号河川跡に連なる女堀川の古流路を、ここでは仮に古女堀川と仮称する。川越田遺跡の北西に展開する今井川越田遺跡は川越田遺跡Ⅲの報告書で述べたように、川越田遺跡同様にこの古女堀川の左岸に形成されている。報告書中で瀬瀨芳之は、集落における住居の重複、土層の観察から住居の短期間の建て替えを推定し、その要因として頻々とした河川の氾濫を挙げている。遺跡周辺は、この古女堀川の繰り返される洪水、氾濫、流路変更に悩ま



第10図 川越田遺跡の河川跡と祭祀跡
(福田 2012 を改変)

れていたと推定される。

また、その継続性を考えた場合、当然のことながら、いつでも川が荒れていたとは思われない。この祭祀は、必ずしも川に対するマイナスの側面のみに働きかけていたのではない可能性、川の恵みに対しても行われていた両面性があると考えられる。

祭祀の期間と回数 祭祀の期間については伴出する土師器の検討から、6世紀中葉から後半の30～50年と推定される。出土状況の分析から、全体が一度に形成されたのではなく、各ブロックごとの祭祀が累積した結果と推定される(論考(1)参照)。

祭祀の道具立て 冒頭で述べたように①第5・9ブロックのように手捏ね土器、土師器、白玉、鉄製品を使用品目とする場合と、②手捏ね土器、土

師器、白玉の場合、③手捏ね土器、白玉、④土師器環、甕と白玉の場合の4レベルが存在する。川越田遺跡では、特に③の手捏ね土器、白玉のセットが最も多く、基本的な組み合わせである。手捏ね土器の製作 手捏ね土器は、成形手法、調整手法によって、3群4系統15類に分類できる。これらの成形、調整に当たっては、土師器の製作手法と工具を用いている過程が明らかである。従って、これまで言われてきたような祭祀の際に単に粘土を手で捏ねて不特定多数の製作者によっての製作ではないと考えられる。土師器の製作工程を踏襲し、土師器製作に用いる工具が使用され、土師器製作者が深く関与した製作が推定される。

以上の各点から、川越田遺跡の祭祀は、集落において頻々と氾濫、洪水、流路移動した荒れ川、古女堀川の水の神に対して行われたと考えられる。集落際の河畔において、通常は白玉と手捏ね土器のセットを用いて祭祀が行われたが、特別な場合(註1)には土師器を併用し、更に須恵器や鉄器を用いる場合がある。

祭祀の器物として特別性がある手捏ね土器を常用するため、その祭祀に当たっては首長の関与が推定される。特に手捏ね土器のセットが多く、希少性のある鉄鍬や須恵器を使用した第5・9ブロックの特別な祭祀に当たっては、より強い効果を求めるために、更に積極的に関係し、首長自らの執行も考えられる。そこには、集落存亡にかかわるような強さ、強い願いが感じられる。

水の祭祀を扱った本稿だが、調査時にも女堀川が決壊し、調査区の復旧は困難を極めた。古墳時代の人々の川の安寧に対する願いは、現代の私たちの願いでもある。

以上、川越田遺跡の祭祀について検討してきた。遺物の分布状況の分析、手捏ね土器の徹底した観察による分類などの詳細な分析によって、具体的な祭祀行為とその対象、効果の強弱といった祭祀

像に迫ることができた。

本研究を下敷きに、考古学における新たな祭祀研究の始まりを期待するとともに、本研究が分析の全てを整合的に説明できる祭祀像が描けていないのも、また事実である。大方の批判、ご意見をお願いし、また改めて再検討する日に備えたい。

なお、本論考の執筆分担当は以下のとおりである。

(1) -1、(2) -1、(3) 福田、(1) -2 赤熊、(1) -3 ~7、(2) -2 大屋、岡本、沢口

謝辞 本稿の執筆に当たっては、調査担当者の瀧瀬芳之、岩瀬譲、田中広明の各氏から調査時の状況について詳しくご教示頂いた。まず3氏に感謝申し上げたい。また、祭祀の検討に当たっては齋持和夫、洞口正史、篠原祐一、板井秀雄、大谷徹の各氏に様々な御教示を頂いた。末筆ながら感謝申し上げます。

註1 大雨などによって大規模な氾濫や流路の変化が起こる、あるいは想定される場合などには、集落の総意を受けた祭祀が執行されたと考えられる。

引用・参考文献

- 相川龍雄 1935「考古学上よりみた赤城の櫃石について」『上毛乃上毛人』219号 上毛郷土史研究会（原典未見）
磯崎 一 1995『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集
井上 太 1987『久保遺跡』『富岡市史 自然編・原始・古代・中世編』富岡市
井上唯雄 1983『赤城山櫃石と群馬の祭祀遺跡』『群馬文化』192号 群馬県地域文化研究協議会（原典未見）
印東丹壺 1922『赤城山櫃石の記』『上毛及び上毛人』75号 上毛郷土史研究会（原典未見）
大場磐雄 1935『赤城山神蹟考』『考古学雑誌』25巻11・12号 日本考古学会
大場磐雄 1943『赤城山の考古学的考察』『神道考古学論考』葦牙書房
小野真一 1982『祭祀遺跡』考古学ライブラリー10 ニュー・サイエンス社
大谷 徹 1993『川越田遺跡Ⅱ』児玉町遺跡調査会報告書第5集
大谷 徹 2011『川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第375集
大塚昌彦 1988『中筋遺跡 第2次発掘調査概要報告書』渋川市発掘調査報告書18集 渋川市教育委員会
大屋道則・栗岡潤 1998『築道下遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第199集
小川和博・大淵敦志 1989『小滝涼源寺』朝夷地区教育委員会・白浜町
小沢国平 1960『こぶヶ谷戸祭祀遺跡発掘調査報告書』美里村教育委員会
小茂田勇 1965『こぶヶ谷戸祭祀遺跡発掘調査概報』『いぶき』第1号 本庄高等学校考古部（原典未見）
岩沢正作 1933『群馬における祭祀関連遺跡概観』『毛野』5・6号 毛野研究会（原典未見）
岩瀬 譲・大谷 徹・栗岡 潤 2003『如意遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第285集
小出義治 1981『祭祀と土器』『神道考古学講座第三巻 原始神道Ⅱ』pp.220~234 雄山閣出版
栗原文蔵 1963『上尾市藤波発見の祭祀遺物』『埼玉研究』第7号 pp.10~13 埼玉考古学会ほか
齋持和夫 1993『ウツギ内・砂田・柳町』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第126集
齋持和夫 2000『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集
小林 修ほか 2005『宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ』赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書第30集 赤城村教育委員会
埼玉県史編さん室編 1982『こぶヶ谷戸祭祀遺跡』『新編 埼玉県史』資料編2
坂本和俊・鈴木徳雄 1981『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第2集 児玉町教育委員会
佐藤康二 1994『大野田西遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第138集
佐藤康二 1998『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第198集

- 篠原祐一 1988「上三川町五分一上ノ原遺跡出土の土製祭祀遺物」『考古回覧』第8号 pp.76～80
- 植山林継 1991「祭器」『古墳時代の研究3 生活と祭祀』pp.161～166 雄山閣出版
- 植山林継 1972「関東・埼玉県こぶが谷戸遺跡」『神道考古学講座』第2巻 雄山閣出版
- 鈴木敏弘ほか 1976『南伊豆下加茂日誌遺跡』南伊豆町教育委員会
- 瀧瀬芳之・山本 靖 1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 瀧瀬芳之ほか 1997『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
- 立石盛詞ほか 1982『後張 本文編Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集
- 立石盛詞ほか 1982『後張 図版編Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集
- 立石盛詞ほか 1983『後張 本文編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
- 立石盛詞ほか 1983『後張 図版編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
- 田中広明 1992『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 谷川啓雄 1927「南豆における特殊遺跡の研究(上)」『中央史壇』第13巻第6号 pp.65～74 国史講習会
- 谷川啓雄 1927「南豆における特殊遺跡の研究(中)」『中央史壇』第13巻第7号 pp.61～72 国史講習会
- 谷川啓雄 1927「南豆における特殊遺跡の研究(下)」『中央史壇』第13巻第8号 pp.74～92 国史講習会
- 洞口正史 1998『下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第231集
- 富田和夫ほか 1985『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 中澤貞治 1988『原之城遺跡発掘調査報告書』伊勢崎市教育委員会
- 中山浩彦 1995『宮ヶ谷戸／根岸／八日市／城西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第172集
- 奈佐勝寿 1777『山吹日記』(群馬県文化事業振興会 1971『群馬県史料集』第6巻日記篇Ⅱに所収)(原典未見)
- 伴瀬宗一 1996『今井川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集
- 東日本埋蔵文化財研究会 1993a『古墳時代の祭祀 - 祭祀関係の遺跡と遺物 第Ⅰ分冊 - 東日本編Ⅰ - 東北・東海地方・中部・北陸』
- 東日本埋蔵文化財研究会 1993b『古墳時代の祭祀 - 祭祀関係の遺跡と遺物 第Ⅱ分冊 - 東日本編Ⅱ - 関東地方』
- 人見曉朗 1989『一般県道新川・江戸崎線道路改良工事内埋蔵文化財調査報告書 尾島貝塚 宮の脇遺跡 後九郎兵衛遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第46集
- 福田 聖 2013『川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第400集
- 藤巻幸男・大木紳一郎 1985『荒砥前原遺跡 赤石城址』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 増田和夫・山本良知 1974『上椿遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第21集
- 安岡路洋・土肥 孝ほか 1974『後山遺跡』上尾市教育委員会
- 山川守男 1995『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集
- 山本 禎・岩瀬 譲 2002『如意Ⅲ／川端』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第276集
- 恋河内昭彦 2005『後張遺跡Ⅲ』児玉町遺跡調査会報告書第20集

研究紀要 第29号

2015

平成27年3月25日 印刷

平成27年3月31日 発行

発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<http://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 巧和工藝印刷株式会社